

平成 21 年 5 月 24 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006～2009
課題番号：18300222
研究課題名（和文）ライフスキル形成を基礎とする薬物乱用防止教育の長期的効果に関する大規模評価研究
研究課題名（英文）Large-scale Study on the Long-term Effectiveness of Drug Abuse Prevention Education Focusing on Life Skills Development
研究代表者
川畑 徹朗 (KAWABATA TETSURO)
神戸大学・大学院人間発達環境学研究所・教授
研究者番号：50134416

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・応用健康科学
キーワード：喫煙・薬物乱用防止教育，ライフスキル教育

1. 研究計画の概要

青少年の喫煙，飲酒，薬物乱用は彼らの現在および将来の健康や発達に重大な影響を及ぼす。こうした行動は十代のうちに形成されるため，行動変容に結び付く喫煙，飲酒，薬物乱用防止教育の実施が学校教育に求められている。

本研究の目的は，国内外の研究によって，青少年の喫煙，飲酒，薬物乱用などの危険行動の形成と密接な関係があることが知られているライフスキルに焦点を当てたプログラムを開発し，その長期的効果を明らかにすることである。その目的を達成するために，以下のような研究計画を立案した。

（1）小学生を対象としたプログラム開発と評価研究

広島県福山市の小学校 4 校と茨城県銚田市の小学校 2 校を対象校として，各地域の半数の小学校をライフスキル教育プログラム実施校（以下 LS 教育校），残りの半数の小学校を対照校として設定する。そして，LS 教育校の 5 年生に対して 2 年間にわたって小学校高学年用のプログラムを実施する。

プログラムの有効性に関する評価は，プロセス評価と影響評価から構成される。プロセス評価として，授業毎に授業評価表を作成し，学習内容や学習活動の意義および児童の授業への参加意欲などについて授業直後に評価するよう，授業担当者に依頼する。影響評価としては，5 年のプログラム実施前に事前調査を実施し，毎年度の全ての授業が終了した年度末に，事前調査と同一の調査票を用いて事後調査を実施する。なお，対照校においてもほぼ同時期に調査を実施する。主な質問項目は，セルフエスティーム，社会的スキル，

ストレス対処スキル，意志決定スキル，目標設定スキル，喫煙，飲酒，薬物乱用に関する態度および行動とする。

（2）中学生を対象としたプログラム開発と評価研究

新潟県村上市の中学校 2 校と同県胎内市の中学校 2 校を対象校として，各地域の半数の中学校を LS 教育校，残りの半数の中学校を対照校として設定する。そして，LS 教育校の 1 年生に対して 3 年間にわたって中学生用のプログラムを実施する。プロセス評価と影響評価の実施計画は，小学校の場合に準じる。

2. 研究の進捗状況

（1）小学生を対象としたプログラム開発と評価研究

研究者，学校長，教頭，一般教諭，養護教諭，教育委員会指導主事などによって構成される共同研究プロジェクトを組織し，介入研究に用いるプログラムを開発した。

小学校 5 年生用のプログラムは，全 11 時間で構成され，個性の尊重に関わる内容（2 時間），対人関係スキルに関わる内容（5 時間），意志決定スキルに関わる内容（1 時間），ストレス対処スキルに関わる内容（2 時間），そして学校におけるボランティア活動（1 時間）からなっている。また小学校 6 年生用のプログラムは，全 11 時間で構成され，個性の尊重に関わる内容（1 時間），対人関係スキルに関わる内容（4 時間），意志決定スキルに関わる内容（1 時間），目標設定スキルに関わる内容（4 時間），そして地域におけるボランティア活動（1 時間）からなっている。

児童に対する質問紙調査は、平成 19 年 4 月～5月に事前調査を、平成 20 年 3月に第 1 回目の事後調査を、平成 21 年 3月に最終の事後調査を実施した。

(2)中学生を対象としたプログラム開発と評価研究

プログラムは、文部科学省科学研究費「ライフスキル形成を基礎とする喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育プログラムの短期的評価」(研究代表者 川畑徹朗、平成 15～18 年度)において開発したものを改訂して使用した。平成 19 年度に 1 年生用プログラム(全 20 時間)、平成 20 年度に 2 年生用プログラム(全 14 時間)を実施した。

生徒に対する質問紙調査は、平成 19 年 4 月～5月に事前調査を、平成 20 年 3月に第 1 回目の事後調査を、平成 21 年 3月に第 2 回目の事後調査を実施した。

各学校の授業担当者によるプロセス評価の結果によれば、小・中学校ともに、ライフスキル教育を受けた児童生徒はもとより、授業参観、学校だより、家庭における学習活動などを通じて、ライフスキル教育は保護者にもなじみ深いものとなり、自分の生き方を考える時間として定着してきたことが窺えた。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

プログラムの実施、プロセス評価、影響評価は、全てほぼ予定通りに進行している。ただし、中学校の LS 教育校 1 校においては、学校側の事情によって、2 年からのライフスキル教育の実施が実質的に不可能になったため、研究計画の変更をせざるを得なくなった。

4. 今後の研究の推進方策

小学校においては 2 年間の介入研究が終了したので、3 回の質問紙調査の結果に基づいて、影響評価を行う。また、LS 教育校の一部については、中学校進学後もライフスキル教育を継続し、プログラムの長期的有効性について評価する。加えて、平成 19 年度から 20 年度にかけて実施したプロセス評価の結果を踏まえてプログラムを改訂し、平成 20 年度より滋賀県大津市において、改訂したプログラムを用いた介入研究のプロセス評価、影響評価を実施する。

中学校においては、LS 教育校において 3 年生を対象としたライフスキル教育を継続し、プロセス評価を行う。また平成 22 年の 3 月に、全ての研究対象校の中学校 3 年生を対象とした最終の事後調査を実施する。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

(1) 今出友紀子、川畑徹朗 他、思春期の子どもたちの喫煙開始に関わる要因、学校保健研究、49、2007、170-179、査読有

[学会発表](計 1 件)

(1) 川畑 徹朗、青少年の危険行動防止とライフスキル教育、第 55 回日本学校保健学会、2008 年 11 月 16 日、名古屋

[図書](計 3 件)

(1) JKYB ライフスキル教育研究会(代表 川畑 徹朗)編著、東山書房、「きずなを強める心の能力」を育てる JKYB ライフスキル教育プログラム 小学校 5 年生用、2008、150 ページ

(2) JKYB 研究会(代表 川畑 徹朗)編著、東山書房、「未来を開く心の能力」を育てる JKYB ライフスキル教育プログラム 中学生用 レベル 3、2007、137 ページ

(3) JKYB 研究会(代表 川畑 徹朗)編著、東山書房、「実践につながる心の能力」を育てる JKYB ライフスキル教育プログラム 中学生用 レベル 2、2006、149 ページ